

[博士論文審査要旨]

申請者：石田惣平

論文題目 会計保守主義に関する実証研究：負債契約からのアプローチ

審査員 蜂谷豊彦  
加賀谷哲之  
円谷昭一

本論文は、会計基準の国際的な収斂化の中で、基準設定機関から排除の対象とされている保守主義に焦点を当て、保守主義がどのような役割を担っているか、またどのような経済的な効果を持つかについて、実証分析を通して明らかにしようとした論文である。とりわけ日本企業の負債依存度を考慮して負債契約に注目し、保守主義によって、債権者と株主・経営者との利害対立から生じるエージェンシー・コストが緩和されるかどうかを検証している。

本論文ではまず、先行研究に従って条件付保守主義、無条件保守主義を表す尺度をそれぞれ定義し、代表的な会計処理方法との関係を分析して、その妥当性を検証している。次に、それらの尺度で表される保守主義が、債権者と株主・経営者とのエージェンシー対立の影響を受ける配当行動、負債による資金調達行動、投資行動にどのような影響を与えるかを精緻な実証分析を通して検証し、負債契約における条件付保守主義及び無条件保守主義の経済的効果を明らかにしている。さらに、内生性の問題に対処するため、外生的なショックである金融危機に焦点を当てて、保守主義が金融危機後の負債による資金調達行動及び投資行動にどのような影響を与えたかという検証も行っている。これらの分析を通して、日本における負債契約の下では、無条件保守主義が株主・経営者による機会主義的な行動を抑制し、負債による資金調達を円滑化し、より効率的な投資をもたらすことを明らかにし、それらが会計基準の設定などに対しても実務的含意も明確に示している点が評価できる。

しかし、本論文にも問題がないわけではない。本論文では、保守主義を表す代理変数を先行研究に従って定義しているが、日本固有の慣行や企業行動を踏まえた定義を工夫するなど改善の余地は残されている。また、保守主義を採用しようとするインセンティブの強さを反映した検証を加えることで、より大きな貢献ができた可能性もある。ただし、これらは本論文の価値を大きく損なうものではない。これまで見過ごされてきた「契約」という視点から保守主義の役割を見直し、負債のエージェンシー・コストを緩和する効果を、精緻な実証分析を通して解明した貢献は大きい。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士（商学）の学位を受けるに値するものと判断する。